

顧問就任挨拶

千代田区立九段中等教育学校水泳部卒業生の皆様

今年度より水泳部顧問として関わらせていただきます

堀川 祐司 と申します。日頃より卒業生の皆様から大会協力役員や活動物品など、現役部員への厚いご支援をいただきありがとうございます。この場をお借りして、感謝申し上げます。

伝統ある水泳部に関われることをうれしく思います。私が競泳を始めた新宿高校水泳部は、九段中等と同じく、千葉県での臨海教室を実施しており、水泳部の目標とする大会は十六校でした。重なる部分も非常に多く、これからの活動が楽しみです。茨城大学水泳部では、屋外プールで人数も決して多くはありませんでしたが、充実した活動をさせていただきました。それだけに、一年間これだけ整った環境で練習ができることに驚いています。効果的に活用させていただければと思います。部活動・学校行事・勉強などで、多忙な現役部員が6年間という短い時間の中で、「競泳力」のみではなく「人」としての成長も実感できるように指導に取り組ませていただきます。

わからないことばかりでご迷惑をおかけすることもあると思いますが、今後とも水泳部の活動に、ご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

水泳部顧問 堀川 祐司

木原凜太郎さん

（九段中等教育学校外部講師）

の特別会員任命について

51回 高田明夫（一游会会長）

2023年6月18日の一游会総会において、木原凜太郎外部講師（水泳部指導）を8年にわたる水泳部への貢献を評価し、特別会員に任命しました。

木原氏は、1973年新宿区出身、麴町中学、日大豊山高校、日本大学を卒業され、一貫して水泳に取り組んでこられた方です。姉・木原珠子氏も日本水泳連盟、オープンウォーターでのコーチをされています。

2015年に当時の坂校長から、水泳部の指導力強化の観点から、外部講師を導入したい、学校で募集してもよいが、卒業後の至大荘などの連携もあり、一游会で推薦してほしい、との要請がありました。青木会長、45回生水野さんとも相談しながら、最終的には66回吉見亜衣さんからの推薦で木原氏にお願いすることになりました。

木原氏は、九段水泳部の活動の中では、上級者の指導を中心に指導をしてきました。関東大会進出（中高とも）の好成績は木原氏の貢献が極めて大きいです。2023年度16校大会でも準優勝、メドレーリレー優勝の成果は木原氏の指導の賜物でした。

2022年から、九段中等教育学校から部活指導員として任命されました。部活指導員とは、校長の監督を受け、スポーツ、文化、科学などに関する部活動の技術指導や、大会、練習試合といった学校外での活動の引率などに携わる人材です。

今後は、単に現役の指導だけでなく、一游会会員になった生徒たちとの交流を継続いただき、ライフタイムでの付き合いをして、水泳だけでなく、人生の先輩としてアドバイスいただければと思います。

まだ至大荘には行っていないとのこと、ぜひ訪れていただき、そこでも指導者の力を発揮いただければ幸いです。

特別会員 就任挨拶

木原 稟太郎

一游会の皆様、お元気でしょうか？

この度、OB総会において一游会の特別会員として拝命を受け、皆様の仲間入りを果たさせていただきました。

改めて、自己紹介と九段での経緯からお話させていただきます。

1973年生まれ。東京都出身。九段の代で言うと63回生。現駒場高校水泳部顧問の小林先生、編集の南川さん、山口さんと同級になります。番町小、麴町中から日大豊山、日大水泳部を経て、1999年から水泳の指導を始めました。ちなみに、公立校受験であれば、学区域の中で九段の予定でした。

現役時代は、藤村スイムスクール、後樂園(現東京ドーム)、セントラルなどいくつかのクラブに所属し、ジュニアオリンピック2位、全中、インターハイ、日本選手権、国体に出場。ハイライトは鈴木大地さん(現日本水泳連盟会長)のラストレースになったバルセロナオリンピック選考会兼日本選手権で、同じチームとして出場できたことです。

スポーツクラブでの指導、マスターズのコーチを長く続けていましたが、そろそろ中学生、高校生の指導をしたいと思っていたところ、2015年に九段水泳部での指導のお話を頂きました。小、中を同じ千代田区で過ごした学校から依頼を受けたことにご縁と喜びを感じたと同時に、長い歴史の中で、外部からのコーチ招聘が初めてであったこと、就任が都高校1ヶ月前であったことに責任とプレッシャーを感じたことを思い出します。当初は生徒達も練習環境の変化に戸惑いもあったと思いますが、今でもそうですが生徒1人1人に愛情を持って接して、寄り添うことを大事に、信頼を築くことに努めました。



運がいいことに3年目の2017年に男子生徒が、ジュニアオリンピック出場、さらに九段の男子では30数年ぶりのインターハイ出場を果たしてくれました。この生徒は高1の時が都のランキングが58位。2年間でインターハイ出場までこぎつけて、さらに日本選手権に出場するまでに成長しました。毎日練習するのが当たり前だった自分にとって、毎日練習できない部活だけでも、やり方によっては可能であること、また10代の伸びしろやポテンシャルの可能性を知りました。続く2018年にも高3まで全国大会出場がなかった男子生徒がインターハイ出場。伸び悩み、苦労も多くありましたが、諦めず、努力し続けることで目標を達成できることを彼から教わりました。

その後、2019年、2020年には関東中学出場。2022年には昨年も書かせていただきましたが、個人、リレーで関東中学で入賞を果たしました。

そして十六校。2015年に初めて体験して、こんなに素晴らしい大会があったのかと知り、感動しました。また毎年、生徒達がこれまでの思いをこの大会で表現し、信じられないようなタイムや結果をもたらしてくれま

す。九段は不思議と十六校になると、一気にチームがまとまり、今までにないパフォーマンスを十六校で発揮してくれます。

今年もまさしくそんな十六校でした。15回生のチームは、最上級生が3人と少なく、チームとしての緩さも感じることが多く、コーチとして直前まで不安を感じていました。ところが、残り1週間ぐらいから十六校に向かう姿勢や気持ちが高まっていき、チームの雰囲気が変わってきました。そして、びっくりするようなレースを生徒たちが次々と見せてくれて、ほぼ全員がベストで泳ぎ、男子は目標以上の総合2位。女子は4人だけの出場で、12位と健闘。男子メドレーリレーは私が来てから初優勝。このレースは私が見てきた中でも最高のレースの1つでしたし、ここまで急激にチームが上昇していったのは初めてでした。

今年は4年ぶりに有観客でおこなわれ、保護者の方やOBOG、また九段生が多く応援に駆けつけてくれて、改めて応援の力を感じる十六校にもなりました。応援に来てくれた皆さまに感謝申し上げます。

また今年入学した中1の佐久間玲が、平泳ぎで全国中学出場を果たしました。普段はクラブで練習していますが、

九段から全国中学出場も久しいことです。まだまだ中1なので今後も楽しみです、他の中学生もこの夏、タイムを大幅に伸ばした生徒も多く、来年への期待も膨らみます。

私は技術の指導やタイムを短縮させることが主な役割ですが、部活でやっている以上、速く泳ぐことよりも部活を通して人間性を高めること、成長してもらうことが大事だと考えています。挨拶がきちんとできること、感謝すること、気配りや助け合いをすること。辛抱や努力をし続けられること。「人の成長なくして、技術の成長なし」今後も生徒たちにはこの事を伝え続け、九段水泳部の良き伝統を受け継いでいってほしいと思っています。

一游会の皆様には、目に見えないサポートなどもふくめ、日頃のご支援に厚く感謝しています。今後も引き続き、九段水泳部および現役生のご支援やサポートをお願い致します。また甲子園の慶應高校野球部ではありませんが、十六校の応援参加もお待ちしております。生徒の力にもなりますし、九段で過ごした懐かしい青春が甦える素敵な時間になると思いますよ。



河童の便り

34回生 赤司久雄

「何が起こってもおかしくない年になった。会える時に会っておこう」と去る3月15日、3年半ぶりに若年寄会メンバーの内80歳前後の10名で会食を行った。まさかその言葉が現実になるとは。

その日26回生森彰英さんはいつもの森節で、お元気に近況を語っておられたのに……。その1か月後の4月21日に天国に旅立たれました。

森さんは元会長として、常に若手との繋がりを念頭に一游会の発展に貢献されました。機関紙「一游」に毎号巻頭を飾る名文を投稿しておられました。大昔、OB戦の800㊦自由形を色褪せた水色のパンツで悠々と完泳しておられたお姿は、多くの仲間の記憶に生き続けています。

今頃はきっと天国で先に旅立って行った多くの一游会メンバーとの再会を楽しんでおられることでしょう。

森先輩のご冥福を心からお祈りいたします。

私はお陰様で80歳を目前に変わらず元気に過ごしております。60歳で菊友会理事会入りしてから早18年が経過いたしました。頼もしい一游会メンバーが続々と菊友会ならびに関連団体で活躍してくれています。

菊友会は、原田忠礼（40回生）会長の下、51回生の高田明夫・河原一弥・藤井和典の3氏に続き、今年度から57回生の佐々木幸一氏も理事会入りしてくれました。

九段中等教育学校の学校経営評議会委員には、原田忠礼氏が新会長に、高田明夫氏が新委員に就任されました。

又、公益社団法人九段の新理事に藤井和典氏が就任、将来の会長候補としての活躍が期待されます。

そろそろ私の出番も終わりに近づいて来たと感じる今日この頃です。

51回生 高田明夫

(近況後報告)

① 2022年に開業届を出し、経営コンサルタント（中小企業診断士）を正式に始め、AIM-HIGH 経営研究所という屋号で活動しています。信用保証協会、東京都、板橋区、台東区の専門家として、企業を訪問し、経営相談や補助金申請のお手伝いをしています。シャンソン歌手、中華料理、プラスチック製造、建設業、ダンス教室など、様々なお客さんのお手伝いをしています。

② 2023年7月に九段中等教育学校の学校経営評議会の委員に任命されました（34回生赤司さんの後任です。40回生原田さんが会長です）。学校長の支援をするため、年3回開かれる評議会に参加しています。学校は、グローバル化、スーパーサイエンスハイスクールの舵を切って進むようとしています。そんな中で、至大荘行事の遂行、物的にも心理的にも安全な学校として、支援していきたいと思っています。

③ 高26回の森英彰さんの逝去はとてもショックでした。森さんが残してくれた一游誌の記事をまとめたいと思います。

④ 2024年は、九段開校100周年になり、一游会発足

95周年になります。一游会としても、在校生とともに何らかのお祝いの会が開ければと思っています。

(アフターコロナ)

① 新宿高校、立川高校、日比谷高校と、遠泳教育を実施している学校のOBで月1回程度、集まっています。9月に千葉県館山でOB隊列を組んで遠泳することを計画しています。（新宿高校の寮前から立川高校の寮前まで2km）2023年はお試しですが、いずれ拡大し、至大荘にご招待できないか、と考えています。

② オープンウォーターの大会、至大荘の助手練習で泳いでいます。湘南オープンウォーター大会に一游会メンバーと出ることを楽しみにしています。

特集1 森彰英元会長 追悼

森彰英元会長を偲んで

51回生 高田明夫（一游会会長）

2019年、前会長の青木さんが急逝し、空白の会長職をどうしたらよいか、真っ先に相談したのが、森さんでした。森さんからは、君しかないと後押しされたのと、会長職は大変であるが、必ずやってよかったと言える大変すばらしい職であり、会長を退いているものの、会長を8年間やったことが自分の誇りになっている。ぜひ引き受けなさいと進められました。その言葉を受けて、一游会の会長職を務めています。

森さんとお会いし、初めてとお話したのは、2016年品川で45回高木さん、63回南川さんと同席した時だったと思います。その時話題になったのは、湯野先生に関する数々の逸話でした。①湯野先生の若き日に三国同盟のムツソリーニ、ヒトラーの前で演舞をするために、学生ながら選抜され、欧州遠征したこと、②戦後、剣道が禁止さ

れ、欧州遠征も語られなくなったこと、③至大荘を復活させるために努力され、先生方の組織である游泳部と生徒を

直接指導する組織として、観海亭をあてがい、そのトップを亭長とし、責任者として行動させるようにしたこと、④遠泳中水没した生徒を助手の女性が気付き、一命をとりとめた後、湯野先生が至大荘から姿を消したが、観海亭にウィスキーをもって現れ、お礼を言ったこと、⑤2004年に放映された至大荘のドキュメンタリーの取材をめぐり、学校・助手との間で軋轢があったことを、**よく**ディレクターの取材を行い、ディレクターに手記を欠いてもらい、一游誌に掲載したこと、などなど、知られざるお話をお聞きました。（この時の知られざる歴史をちゃんと記録に残そうという趣旨で、至大荘90周年の歴代亭長の手記を編纂する一游誌が生まれました。）

コロナ禍でありましたが、2020年以降、7月と12月に森さんと私と一游会幹事とで大井町で懇親会を開きました。毎回言われるのは、やはり一游会会長職をしていた時が人生で一番輝いていた時だった、ということです。

一游会における森さんの功績は、1955年ころから今に至る一游会の出来事を活写してきた数々の文章にあり、時代を超えて、九段坂上の水泳部、水泳部OB・OGたちの行動を綴ったことにあると思います。

数々の文章は、いつか若い世代の人も読みやすいようにまとめなおしたいと思っています。

2022年年末近くまで取り組んでいらったのは、明德義塾中学高校の50周年誌の取材だったと伺っています。まだ発刊されていませんが、「私は見た・明德義塾の昨日・今日・明日」、「立体的卒業生インタビュー」「明德スピリットはここに生きている」という50周年の中心となる記事を書かれたそうです。(2023年発刊予定) 明德義塾は野球部、剣道部、ゴルフ部などが有名な学校ですが、英国パブリックスクールを模した全寮制で、そこで起こる人間模様に至大荘を思い起こされたとのことが印象的でした。取材・執筆中の2022年7月にはがんの手術をされ、取材時には娘さんに同行をお願いし、最後の仕事として完遂されました。ぜひ読んでみたいと思います。

森さんは、会長として現役高校生、大学生と積極的に交流し、個別にも相談に乗ってらっしゃったそうで、その子たちが夢に向けて踏み出した姿をたくさん語っていました。私も、会長としてそのような現役生との交流をしたいと考えています。(合掌)



森彰英先輩を偲んで

34 回生 赤司久雄

去る4月26日の夕刻、家の電話が鳴った。森さんのお嬢様から「父が4月21日に亡くなりました」との報告であった。思わずわが耳を疑った。まさかまさか、つい1ヶ月前にいつもと変わらぬお元気なお姿に接したばかりなのに…。

3月15日、3年半ぶりに若年寄会のメンバーの内後期高齢者11名で、市ヶ谷の中華料理店でテーブルを囲んだ。30回生の津村徹さんから「何が起こってもおかしくない年になった。会える時に会っておこう」との声掛けで実現したものであった。最長老として森さんにも出席いただき、いつもと変わらぬ森節で熱弁を振るわれていたのに。

後日再度お嬢様からお手紙を頂戴した。文面に「父は例年秋風が吹く頃になると元気が無くなるほど夏を愛しており、その原点は青春時代を過ごした興津の海にあったことは間違いありません。昨年の丁度今頃、どうしても海に行くと言い出し、一人で鴨川のホテルを予約し2日ばかり過ごして来ました。その頃はすでに余命を意識しておりまし



たので、さまざまな思いとともに海にも別れを告げて来たのだと思います。本人も満足そうでした。」とありました。森さんなりの終活を行っておられたのであろう。今から思うと3月の懇親会の開催も言い出しは津村さんであったが、その実森さんが最後の顔合わせの場を演出されたような気がしてならない。

森さんとの初めての出会いは今から60数年前に遡る。九段のプールで、至大荘の観海亭で、若年寄会の様々な出会いの場で、森さんの豊かな人間性と優しさに触れ、人生の手本として慕って来た。

森さんが一游会に残された功績は枚挙に暇がないが、会長時代に何よりも腐心されていたのは、若手会員との触れ合い・繋がりであった。親子ほどの年差がある新卒の会員と、同じ河童の仲間として対等の立場で一游会の在り方について常々熱く語っておられた。その思いはその後会長職をバトンタッチされた故青木俊行さん(45回生)や現会長の高田明夫さん(51回生)に引き継がれ、今も一游会活動の原点として生き続けている。

森さん、本当に有難うございました。どうぞ安らかにお眠り下さい。合掌。

一游会と共に七十年 森さんとのお別れ

高十一回生 津村 徹

コロナ禍も漸く終焉したと思われる令和五年三月、やっ
と若年寄会を開くことが出来ました。ただし「若」ではな
く「本」年寄りだけで集まりました。

高齢者直撃のコロナウィルス、面談どころか入院時の見
舞いも許されない状況下、さらに三年のブランク、さらに
言えば皆さん立派なお年寄り。そんな心配はムダ、元
気々々流石一游会でした。

最長老の森さんもいつもと変わらぬご様子で食事、歓談
を楽しんでおられました。

わずか一か月後、突然森さんの訃報が届きました。葬儀
も終わってました。本当に突然でした。呆然としました。
あれは最後の別れのつもりだったのか。なんで近いうちに
飲みましようという私の誘いを「うん」と言っただろうか？
か？ただ単に皆に会いたかっただけだったんだろうか？。

森さんのお付き合い昭和三十一年私が九段水泳部に入
った時から始まりました。

入部した年すでに森さんは先輩としてプールに存在して
おりました。

確か二年の時、森さんはヘッドコーチとして現役の指導体制や若手OBの取りまとめを行い練習方法がガラッと変化したことを覚えています。

それまで来るOBによって練習内容が変わり、ダッシュの本数まで増えたり減ったりいい加減でしたから。

当時一游会の活動はほとんど若手OB(新卒・浪人生・大学生)が一游会の幹事長を中心に行っておりました。

コーチ・合宿対応(賄いは新卒から)至大荘助手対応・普段寄られない先輩からの寄付集め・一游の発行等結構大変でした。森幹事長の負担の一端がわかると思います。

その頃から、皆でつるむ行動は盛んでした。伊豆の無線旅行・信州旅行・竹の子パーティー・若年寄会・・・

七十年を超える長い期間いろいろよく集まって楽しみました、必ずと言って良いほど森さん中心でした。

リーダーシップの取り方も自然体で、あの柔らかな物腰に我々も抵抗なく動いていたように思います

森彰英さん制作、脚本、監督の大芝居しかも助手総出演も大評判でしたね。

大卒後サラリーマンを経て独立、夢であったジャーナリストとして最後の最期まで全うされました。

七十年間よくまあ御付き合ひ頂き有り難うございました。私も暫くすれば追いかけますから。

これからも大好きだった一游会をずうっと見守ってください。
謹んでご冥福をお祈りいたします。



森彰英先輩を偲んで

57 回生 白田光志

森さんに一游会長をお受けいただいた頃、私の同期の小松崎(旧姓萩原)さんが幹事長を努めていました。私は彼女から依頼されて、会計や一游誌の発行のとりまとめ等を手伝い始めたのですが、急な彼女の結婚と大坂への転居に伴い、一游会関係の仕事を全面的に引き継ぐことになったのでした。20年程前になるかと思いますが、その頃から森会長、副会長の津村さん、赤司さんと一緒にいたたくさん機会が多くなり、若年寄会の末席にも加えて頂くようになりました。

年末には神田のふぐ割烹「藤むら」で若年寄会の忘年会が行われていました。森さん津村さん赤司さん原田さんをはじめ大勢の先輩方と一緒にさせていただきました。当時は大学生の一游会員にも声をかけていました。私もそのころは若輩で、会費もほとんど払っていなかったような記憶があります。

春のタケノコのとれる季節は、青梅の二俣尾にある武市さんのお住まいでBBQがありました。森さん津村さんは前乗りして、前日から宿泊されていたと記憶しています。裏山でとれたタケノコづくしと酒が飲み放題で、私は家族

や同期の吉田君を誘って参加していました。後に吉田君のご子息は九段中等に入学し水泳部に入り、高校卒業まで続けて一游会員になりました。あの頃小さかった私の娘もすっかり成人となりました。

森さんに麻布十番で飲みましようとお誘いいただき、「あべちゃん」という店にご案内したことがありました。私の職場から近いのですが、森さんのリクエストだったと思います。もつ煮込が有名な名店で、17時にはお客で一杯になってしまうのです。適当な理由で会社を早退し、16時30分には二人で入店。名物のもつ煮込と焼き鳥、ビールを注文しました。

職場が近いので、上司などに顔を見られないように入り口を背にして飲んだのですが、そういう酒は特に美味く、森さんとの良い思い出になりました。

至大莊助手時代の話は非常に盛り上がり、浜屋の買い出し話には大層喜んでくださいました。多い日は夜中に三度も通い、ご店主を歌で起こすなど、今では許されないでしょうけど、当時の新卒は毎晩の買い出しが楽しみでした。あの時間だけは観海亭の重圧から解き放たれて、同期の皆と浜屋の兄ちゃんに貰ったアイスクリームを堤防に座って食べました。



一游会には水泳は卒業した、と言われる先輩方が多いのですが、森さんは泳ぐことが好きでした。毎年、OB戦で800mFrを泳ぐことを楽しみにしていて、毎年チャレンジされるお姿を拝見したものです。

昨年末の12月30日現在の高田会長と副会長メンバーで、森さんをお迎えして忘年会を行いました。その会合の直前に、人生最後の仕事と言われていた明德義塾学園の50年誌の原稿を私たちにも共有してくださいました。とても興味深く読ませていただいたのですが、その編集後記にご自身のガン治療について書かれていたのです。私はそこで初めてご病氣のことを知りました。

とても心配していたのですが、お会いしたところ顔色も良くお元気で、そんな大病と闘っているようには全く見えませんでした。プールにもときどき行って泳いでいると言われていました。一人で電車に乗って大井町まで来てくださり、お酒を飲みながら、懐かしいお話を拝聴することができました。帰りもタクシーをお勧めしたのですが、「電車で大丈夫」とお一人で帰って行かれました。大井町線の大井町ホームで後姿をお見送りしました。

年末にお会いする機会を得て、きちんとお礼をお伝えすることができて本当にありがたかったです。お世話になったことへの感謝を忘れず、後進のためにできることをやっていこうと思います。

森彰英さんの眼と心…急逝を惜しむ

渡辺照正

真実、事実、実相を探求することでは似ているが、学者は文献を中心に自分の論を構築するのに対して、ジャーナリストは、資料〈文献・写真・映像等を含む〉の渉猟に加えて、関係者への徹底的な取材から得た内容を踏まえて、特定の時代・社会・人物を構築する。この“人から話を聞く”ということが、ジャーナリストには欠かせない。

森彰英さんは、光文社の雑誌編集を経て、33才で独立してフリーのジャーナリストになった。ある人、ある社会、ある時代への強い関心は、生来のものかもしれない。関心・好奇心が強いからこそ、自分が接した資料や人物の内容の記憶は、いつまでも鮮明だ。私たちは、彰英さんの口から語られる彼の先輩、同輩、後輩たちの話に聞き入り、そこから“九段水泳部”という世界を体感し、充実させ、そして満喫してきた。一游会の会長職を長く続けてきたこともあって、私たちよりもずっと若い世代の後輩たちと向き合う機会も少なからず、彼等に対する驚嘆と期待と羨望の感想も新鮮だった。

使い古した競泳パンツで400米や800米をクロールで黙々と（泳いでいるときは誰でも声は出さないが）泳ぐ姿は、長らくOB戦の老練な華であった。それに魅せられた私は、今も黙々と泳ぎ続けている。

若年寄会という70〜80代〈発足当時は60〜70代〉のOBの集まりは、多摩青梅の武市宅での竹の子パーティーと暮の忘年会が主イベントだ。OB戦やその他の一游会の行事でも、彰英さんの“森節”に耳を傾けることが出来た。彰英さんはまた、毎年の「一游」に、比較的長文の投稿を寄せている。ここにも、彼の人、社会、時代への関心やそのスタイルがうかがわれる。淡々とした客観的な描写の中に、慈愛や友情が滲み出ている。

高田会長から今回森彰英さんへの追悼文を書けとの指示を頂いたのを機会に、数ある彰英さんの著作の中で、快作の一つとされる「行動する異端…秦豊吉と丸木砂土」（TBSブリタニカ発刊）を繙いた。内容の紹介は省く。ジャーナリストの真骨頂・真髓がこれだ。

この誌面を借りて、今年他界された愛すべき後輩、阿部耕己君、渡辺博志君のご冥福を、併せてお祈りいたします。



特集2 阿部耕己さん 追悼

阿部耕己君の『メメント・モリ』

39回 須貝洋一

阿部に初めて会ったのは、昭和40年4月の九段高入学式だった。同じクラスに彼は居た。と言ってもはつきり認識したわけではなく、お互い母親同伴の帰り渋谷から乗ったバスに彼らが居て、あっ！こいつ同じクラスだという程度で、お互い名前すら知らない同士。

5月も後半になり、そろそろ水泳部に入らないか、と思って、クラスの情報を探ると阿部が水泳部だというから、彼の案内で部室に行き入部、たぶんその時初めてしゃべったんじゃないかな？

至大荘の遠泳では、彼は花のトップ。その年は守谷から出て興津上陸。私は何故か事前通告なしに現地にて遊泳不可ということで、興津の上陸地点で校旗を立て阿部を先頭に上陸する面々を迎えた、その時は実際彼がうらやましかった記憶はある。

3年間の水泳部生活における阿部は、記録的に目覚ましいものは全くない。水泳選手に向いていないのである。当

時のOBをして忍法「おそ泳ぎ」と言わしめた。選手として成果はなかったものの、水泳部生活は楽しんだのだと思う。その後のOB生活・観海亭生活・一游会その全てを十分に満喫したと思う。

社会人になって、お互いそれぞれ住む世界が違っていき、それなりの責任も出てきて、学生時代のように年がら年中つるんでいることはなくなり、付き合いの回数は減っていった。社会人晩年60歳近くからだろうか、再び行き来が増えていく、国内外を旅行したり、スキーに行ったり、もちろんあちこち飲みにも行った。

阿部は格好をつけるタイプである。着るもの、車、使う道具全部所謂ブランド品だ。多額の収入があれば事足りるが、通常の稼ぎだから収支が悪い。だから想像だが、住まい以外の資産は、命も含めて使い切った感がある。残った彼の愛車の行先まで決めて逝った。見事というほかない。

6年前の9月白血病発症、一時は敗血症が猛烈に進行危ぶまれるも回復、臍帯血移植後半年の生存率4〜5%との宣告を受けるも驚異の復活、そして退院。体力回復のため、16階自宅の往復は階段使用、3年ほど前より単独で登山するまでに至る。彼の遺影は一昨年10月中央アルプス木曽駒ヶ岳前峰中岳山頂でのスナップ。オレンジ色のヤッケはもちろんブランドものであった。

昨年冬季は数回スキーをするなど元気でいたが、春頃より尿管・膀胱・胆管など次々発癌、入退院が続くようになる。コロナのため見舞い不可。20日間に及ぶ肝臓左切除オペより8月末生還。11月には箱根に紅葉見物に行くなどしている。年末に恐らく末期がん余命4月〜6月の旨宣告を受けた模様。自宅療養を選択、時たま映画などを観に行くも、年明けあたりより厳しい状況に、経口摂取が不可となり、3月に見舞った折、「王将の餃子が食いたい!」と言っていた。

4月20日妹さんより未明に亡くなったとの知らせ、その日小生はいつもの如く池袋で観劇、終了後普段は一杯飲んで帰宅するがその気にならず、自宅そばのコンビニで阿部の言葉を思い出し餃子を買って帰った。

3年前の『一游』森彰英先輩の文章中に『メメント・モリ』の記述があります。翌日21日その森彰英先輩も逝かれました。森さんと阿部はそっちでそれぞれのメメント・モリを語り合っているのでしょうか。

合掌



阿部耕己さん（39回生）をしのんで。

40回生 山口行正

阿部さんは、飲み会の席などで後輩などによく話をしていたのを思い出します。そのするどい指摘は70歳を超えても健在でした。

1969年夏、私たち40回生は高校新卒、阿部さん達39回生は卒業2年目、観海亭での至大荘生活は、すごく楽しいものでした。

1973年11月、阿部さんの誘いで、28万トン（全長300mぐらいの巨大船）のタンカーでアルバイトを一緒にしました。

総勢200人ほどの技術者、作業員などが10日間、千葉港から大阪港へ航海しながら最終仕上げと点検などを行なうものでした。

その食事を賄うコックさん達の手伝いが仕事でした。

アルバイト8名は男女半数で、阿部さんの意中の人もいたりして、印象に残る10日間でした。

1987年夏、阿部さんの会社の人たちと大島に1泊2日のクルージングに行きました。前述とは別の人ですが阿部さんの意中の人もいました。

最近、5年前（2017年）に白血病を発症、入院を繰り返していました。そして克服、2021年には登山を楽しんでいたようです。

ところが昨年（2022年）10月新たな、がんが見つかり、年末には阿部さんから余命半年とのメールが届きました。

宣告があっても何年も元気でいられる人も多くいますし、もう少し時間はあると願っていましたが、今年4月に帰らぬ人となりました。

病気になってからの5年間ぐらいは、立派な存在感のある人でした。

また阿部さんはついに結婚しませんでした。

振りかえってみますと、たびたび純粹に女の人に恋をして、そのつど、一生懸命生きていたように思われます。

阿部さんには高校以来、50年以上も付きあっていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

追悼文

40 回生 石川芳治

阿部さんと二人だけで時間を共有した活動は二つあったと記憶しています。

ひとつは大学4年時の就職活動。訪問企業は違ったが赤坂・虎ノ門地域にある企業だったせいだ1日だけ二人で就活時間を共有した。幸いにして、僕はその日に新卒採用時から70歳まで働くことになる企業を見つけたのでした。

二つ目は東京都水泳協会の競泳競技役員資格を取得したこと。2014年初めに阿部さんから資格取得の誘いがあり、2014年4月から2018年3月迄の4年間有効な競泳競技役員ライセンスを二人揃って取得しました。二人の仕事が休みとなる土曜日開催の大会を選んで年に5、6回ほど辰巳国際水泳場に通い、阿部さんと一緒に競技役員として大会運営をサポートしていました。担当した役割は1)スタート、折返し時の泳法ルール監視と2)計時(折返し時とゴール時)。阿部さんは泳法ルール違反を厳しく監視していました。

主に参加していた競技会は、小学生から高校生までのスイマーが年令別に競技する「ジュニア大会」、北島康介杯と

冠した「東京都選手権」(当時、トップスイマーであった萩野公介、瀬戸大也、渡辺一平、池江璃花子、大橋悠依選手等も出場していた)。また、十六校大会では九段水泳部の活躍を念じながら競技役員を担当していました。十六校大会の開催場所が参加代表校の253プールから辰巳国際プールに変わっており、時の経つのを実感しました。

競技会終了後は食通(食べ物にうるさい)の阿部さんと二人で銀座、日本橋、神田界隈の蕎麦屋または老舗洋食屋さんで夕食する事になっていた。最後に行った蕎麦屋は「神田まつや」また、老舗洋食屋の最後の店は神田神保町の洋食店「ランチョン」でした。

2017年9月から白血病の入院生活が始まっていた阿部さんは2018年以降の競技役員資格更新を断念。阿部さんの競技役員ユニフォームを譲り受けた2018年からは僕ひとりで辰巳プールへ通う事となった。

コロナ下の2021年、白血病治療から3年ほど経過して体調が安定していた阿部さんは独り山登りを始めていた。初心者コースから徐々にレベルを上げながら登山していた。ただ、単独行のため危ない経験をした事もあったようです。僕は低山登山をたくウォーキングと水泳で体力作りをしていたが、30分歩くと一旦休みを入れないと歩き続けられない体調でした。

2022年になると阿部さんが木曾駒ヶ岳登山を誘ってくれたが、僕の坐骨神経痛が一向に良くならない為二人での山行きは成らなかった。二人で山登りに行けなかったのが残念です。

阿部耕己先輩のご冥福をお祈りいたします。

40回生 石川芳治



学生コーチより

94回生（中等14回生） 藤沼 こなみ

一游会の皆様、日頃からご支援、ご声援ありがとうございます。現在学生コーチを務めております、94回生の藤沼こなみです。現役時代の経験を活かして、現在は後輩への指導を行っております。

今年度は山口先生、乙部先生、新しく赴任されてきた堀川先生の3名の顧問の先生方と、今年度も引き続き水泳部の指導をしてくださる木原コーチのもと、活動を行っております。部長の南慶汰を中心とした6年生男子3名がそれぞれのやり方で後輩を引っ張ってくれています。部員全員が十六校、十二中に向けて自分の課題に真摯に向き合い、チームとして一致団結して日々の練習に励んでいる姿が見られ、私も学生コーチとして少しでも選手の技術面・精神面を支えていけたらと思っています。

先日、東京アクアティクスセンターで開催された十六校が終わりました。高校生全員が各々の目標達成に向けた泳ぎを体現する姿に私も心を打たれました。そんな泳ぎも応援も熱い十六校が終わり、6年生が引退し、新部長の村松晃太を中心に16回生が上級生となって支えていく部活が

スタートします。16回生は人数も多く、学年の仲も良く、部活の様子を俯瞰して見れる子がたくさんいます。だからこそ来年の十六校までの1年間、16回生一人一人が最高学年としての自覚を持ち、それぞれの役割を全うして部活を支えていってほしいです。そして何よりご指導ご支援してくださる方がいることに感謝の気持ちを持ちながら部員一人一人が切磋琢磨し競技レベルも共に上げていけるような部活になるよう、私も選手達のサポートに徹し、見守っていきたいと思います。

一游会の皆様、今後ともご支援、ご声援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。





十六校 審判長を終えて

90回生（中等10回生） 加藤 麗音

今年度十六校で審判長を務めました、中等10回生の加藤麗音です。

今年度は初となる東京アクアティクスセンターでの開催でした。

選手を引退してから役員やコーチとして九段水泳部に関わり続けて来ましたが、まさか自分が大舞台で審判長として大会を運営する立場になるとは思っていませんでした。

「あの加藤が？」 「まさか麗音が審判長になるなんて。」
というお声も頂きました。そうです、あの加藤麗音が審判長です。（笑）

例年通りの辰巳国際水泳場から会場が変わり、会場や時間の条件により今年は特に準備が大変だったと感じています。私自身、以前は泳法審判員の主任として9名のチームをまとめていましたが、今年は役員160名を指揮する立場に変わったために責任と重圧に潰されそうになりながら準備を進めてきました。これまでの人生で最大の役回りだったので、これまでの経験をフル活用して挑みましたが、九段水泳部で得た「競技に対する姿勢や意識」「仲間を信

頼して目標に向かうこと」などの経験が特に自分を助けてくれたと思います。また、補助役員として数多くの助言をしてくださった飯島瑠玖さんや、副審判長としてサポートしてくださった加藤大輔さん、十六校役員として参加してくれた後輩のみんなに支えがあつてこそその審判長でした。卒業しても先輩や後輩と強い繋がりを保てる九段水泳部の良さを強く再認識しました。

大会当日は、コロナが明けたこともあり観客の方も多く、声出しが解禁されたことで会場に声援が響いて盛り上がりました。出場した選手の多くはコロナ禍による制限を乗り越えてきた経緯があり、雰囲気や様子からレースにかける強い想いが伝わってきました。九段の選手も一人一人の活躍が光り、男子総合2位、女子は4人で総合12位と素晴らしい結果を残してくれました。男子の4×100mメドレーリレーでは見事優勝を果たし、混継杯を手に入れました。私が審判長を務めた大会で、母校の快進撃を見るのが出来て大変嬉しく思います。

これからも九段水泳部の更なる活躍を期待しています。

卒業11年目を迎えて

84回生（中等4回生）飯島 瑠玖

卒業11年目を迎えた2023年。最近は、現役部員を直接指導することはないが、ベスト表の作成、顧問の先生方や木原コーチ、中等卒業のOB OGとの連絡、九段プールで開催する諸大会の運営、アクアティクスセンターでの競技役員など、いろいろな活動が今でも続いている。今年の夏を振り返り、嬉しい出来事が多くあったので、紹介したい。

まず、同期の結婚。最近はテレビでの出演機会も多くなった、ラパルフェ都留。なかなかライブは見に行かないが、テレビに出ているときは、いつもチェックしている。結婚するかもという話は本人から聞いていたが、まさかそのニュースをテレビで知ることになるとは！4人の同期の中では結婚第一号。ぜひ皆様からも祝福の声を送ってほしいとともに、これからも応援してほしい。

二つめは、至大荘行事の再開。久しぶりに守谷の海に、生徒が戻ってきた。私も一週間游泳助手として参加した。行事をつくる助手は、多くの一游会員によって支えられているが、大学生や二十代の水泳部出身の助手がほとんどい

ない課題が続いていた。ところが、今年度ついに92回生の山来、93回生の和泉田と安井、94回生の八木の4名が助手として行事に参加した。水泳部の後輩が参加してくれたことは、非常に嬉しい出来事であった。そして、彼らが生徒と真剣に向き合う眼差しが見られた一週間であった。

三つめは、十六校大会の審判長を後輩の90回生加藤麗音が務めたこと。彼は新卒から十六校役員を務め、卒業5年目にしてついに審判長を務めることになった。会場が変わるとともに、審判長を支える十六校総務や主任のメンバーもほとんど役員経験がない中、これまでの知識や経験を生かしながら、なんとか大会をやり切ることができた。また、至大荘でも活躍した4名が十六校でも役員として協力してくれたのはありがたかった。

嬉しい出来事がたくさんあった今年の夏。これからもよい出来事がたくさん続くように、一游会のメンバーとの絆を大切にしていきたい。

至大荘 観海亭亭長より

陸上部OB 卒業6年目 藤島 氷河

今年度の観海亭亭長を務めました、九段中等9回生(卒業6年目)陸上競技部OBの藤島氷河と申します。

今年度の至大荘が無事終了いたしました。4年ぶりに生徒を迎えることができ、本当に感無量でした。

一游会の皆様方には、九段プールでの日曜練習や、守谷湾でのプレ、本番期間にご参加くださったり、備品、食事面での支援だったりなど、様々な形でご協力いただきました。皆様のご理解ご協力のおかげで、生徒を万全な状態で迎えることができたのだと感じています。本当にありがとうございます。

今後とも、引き続きのご支援ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。





新入会員紹介

新井 凜子

彼女は5年生から水泳部のマネージャーとして入部しましたが、驚くべきは部員とのとけこみ具合でした。後輩とも気さくにコミュニケーションをとり、OBOGや先生方、コーチとも連携を取り、マネージャー業務に徹してくれました。彼女の明るさはOGとなっても部活を盛り上げてくれそうです！

伊藤 利衡

卓球部からの電撃移籍をしたトシ。卓球部とは思えない体つきをしておりますもパワフルな泳ぎを見せてくれました。寡黙な好青年トシ。久しぶりに顔を見たい気持ちが大きいです。

高橋 優斗

14回生のエース高橋、顔良しカリスマ性有り、泳ぎも速いというスーパースイマー。一年間部長としての役割を果たしみんなの憧れとなった彼は、大学ではどんな活躍を見せてくれるのでしょうか。期待ですね。

藤沼 こなみ

こなみは6年間で誰よりもタイムを伸ばしたという印象が強いです。こなみが先輩になっていくにつれて練習でも普段の生活でも後輩を引っ張っていく姿が頼もしかったです。毎回のレースで着実にベストを更新していく姿に先輩たちは感化されていました(笑)集中する時とみんなで楽しむ時の切り替えが本当に素晴らしくて先輩ながらいつも尊敬していました。彼女のその強みが彼女自身を高めたのだと思います。

そんな彼女は大学から新しくラクロスを始め、真っ黒に日焼けしています。新たな競技でも彼女が力を伸ばして活躍することは間違いないでしょう。

八木 いろは

なんでも泳げる万能選手！彼女は個人メドレーの選手でありながら、短距離や長距離も泳げる選手です。また女子選手の中でも特に練習に強い。メイン練習の前には皆で辛いかからやりたくないと言っていても10秒前の合図があるとすぐに切り替えて、高い強度で練習をやり切る姿は本当にかっこいい！！

入部当初は、人見知りを発揮して話すときも中々目が合わずコミュニケーションを取るのが少し大変でした笑：一緒に練習をしていくと徐々に人見知りもなくなり、明るく楽しくちよつと毒舌だが、たまに抜けているところもある、そんな彼女の魅力に私は惹かれました。そして、こなみやあいりとまるで三姉妹のように毎日仲良く切磋琢磨しながら、時には部活を辞めたくなったときや辛い時もあつただろうが、お互いを支え合いながら6年間やり切ったことを自信に大学生活を楽しんでほしいです。

矢代 愛莉

愛莉は誰とでも仲良くなれてよく笑う赤ちゃんみたいな子。先輩の懐に入り込むのも上手いし、後輩からも好かれ、本当に優しい子だというのがずっと見てきて思うことです。

そんな愛莉は負けず嫌いな一面もしつかりあって、レースで思うようにいかず涙を流す姿を何度も見ました。誰にでも笑顔で接する反面、心の底では「負けたくない!」と思っているのが愛莉です。その見た目と裏腹な精神力と愛嬌でどんな状況も和ませる愛莉はこれからさらに多くの人に愛されることでしょう!

現役合宿レポート

93回生(中等13回生) 望月 愛耶

2023年10月2日(月)～4日(水)、神奈川県相模原市の桐花園にて2泊3日の水泳部合宿を行い、1年生から5年生まで36名が参加しました。一游会からは、92回生齋藤、93回生の和泉田、下川、望月の4名が参加しました。2018年3月までは静岡県河津で毎年合宿を行っていましたが、宿泊施設の閉館やコロナ禍のため、5年間合宿を開催できませんでした。現役部員は全員初めての水泳部合宿です。

1日目午後、2日目午前・午後、3日目午前の計4回練習を行いました。最終日の練習では中学生高校生全員が同じメニューを取り組み、強度の高い練習でも声を出し合っ
て一丸となり非常に盛り上がっていると感じました。練習の声がプールから離れた建物にいても聞こえるほどの熱気で、お互いを高め合う姿が素晴らしかったと思います。

高校生は全体的に練習のスタンスも良く、一人一人が練習の質をあげるために、周りを巻き込み、声出しを行う姿勢が大変良かったです。また、練習のための練習ではなく

しつかり大会を意識した強度の高いメニューをこなし、全員で部活を作り上げていく様子も見られました。

自分たちが見ていた後輩たちがこのように成長を重ねて人としても選手としても立派になっていって、私としても大変刺激をもらいました。

中学生は、水泳初心者も多い中でスイミングクラブ並みにきついメニューを必死にこなす姿が印象的でした。まずは自分に負けない心をもつこと。部活として合宿に来た意義を考えること。みんなで部活を作り上げていくこと。それらを、上級生を見ながら不慣れだとしても練習を頑張ることや練習以外の生活の中で学んで吸収していく中学生を心から応援したくなりました。

部活全体でとても仲が良く、学年問わず切磋琢磨できる関係が築けており、明るく楽しい雰囲気毎日練習がきつくても行きたくなるような抛り所になる部活体制なのではないかと思います。今の学年の子達の個性も出ていてこのような部活のあり方も形として素敵だと思います。





